

学童期・青年期における自己呈示の発達的研究

吉 富 千 恵

1. はじめに

日々の生活において「私は、勉強が得意です」、「私は、運動が苦手です」等、私たちは自己の能力や性格について、他者に話す機会がしばしばある。その際、会話自体が他者との相互行為である以上、自分の発言が他者に何らかの印象を抱かせることとなる。「他者から見られる自分を意識しながら、他者から見た自分の姿を自分にとって望ましいものにしようとする行為」を、自己呈示 (self-presentation) と呼ぶ。(安藤, 1998)

これまでに自己呈示の研究は、大人を対象として、誉められた場面や成功場面において自己卑下的 (self-deprecating) に呈示するか、自己高揚的 (self-enhancing) に呈示するかという観点から行われてきた。具体的には、個人の成功については自己卑下的の呈示を行うが、自己の所属する集団の成功は高揚的に呈示することを見出した研究 (村本・山口, 1994) や、自己卑下的の呈示者への他者からの印象を検討した研究がある (吉田・浦, 2002)。

一方で、社会的スキルとしての自己呈示が、いつ頃から習得されるかといった発達の観点から検討された研究は、吉田他 (1982) を除いて見当たらない。吉田他 (1982) は、小学2, 3, 5年生の男女を対象に、クラスの児童の前で先生から運動能力を誉められた時、それを当然のこととして受け入れ自己高揚的呈示をする子供と、誉められたことを否定した自己卑下的の呈示を行う子供とでは、どちらの方がクラスの児童から能力評価および性格評価の面で高く評価されるかを、シナリオ法を用いて実験した。その結果、小学2年生では自己高揚的呈示を行った子供の方を、自己卑下的の呈示を行った子供よりも能力を高く推定した。しかし、小学5年生ではその反対の結果を得た。性格評価については、すでに小学2年生の段階から自己卑下的の呈示者の方が、自己高揚的呈示者よりも高く評価されると認知していることが明らかとなった。これらの研究より、日本の児童が、早い時期より自己を控えめに呈示した方が、相手により印

象を与えることを学習していることが明らかとなった。

しかし、吉田他（1982）の研究以降、児童を対象にした自己呈示の研究はなされておらず、当時の親世代よりも、西洋文化の影響をより受けて育った親の下で教育を受けた児童が、同様の自己呈示を行うかは定かではない。また、中学生・高校生・大学生までを対象とした研究は見当たらない。発達的な観点より自己呈示を考えるのであれば、児童期のみに限定せず幅広い年齢を対象とすることが望ましいと思われる。さらに、吉田らの研究では、聞き手が呈示者に対して抱く能力及び性格の認知に焦点をあてており、発話者の呈示動機及び、聞き手の呈示者に対する印象を形成する理由については検討していない。

よって本稿では、現在の学童期の小学生と、青年期にあたる中学生、高校生、大学生を対象に、自己紹介場面における自己呈示について、呈示者及び聞き手の呈示動機を含め調査的検討を試みた。

2. 方 法

2. 1 被験者

被験者：小学校3年生から6年生、中学校1年生から3年生、高校1年生から3年生、大学生の男女計363名にアンケートを配布し、333名の有効回答を得た。学年及び性別の内訳は下記の通りである。

表1 被験者

	男	女	合計
小3	14	22	36
小4	19	17	36
小5	13	18	31
小6	16	14	30
中1	14	10	24
中2	28	19	47
中3	17	7	24
高1	18	11	29
高2	14	10	24
高3	13	13	26
大学	11	15	26
合計	177	156	333

2. 2 質問紙の構成

小学生、中学生、高校生に対しては、転校生が新しいクラスにて自己紹介を行うという設定で、あらかじめテープに吹き込んでおいた「自己高揚的自己紹

介」と「自己卑下的自己紹介」を聞かせ、①どちらの子供により好感を持たせたか、②それはなぜか、③好感をもてなかったと感じた挨拶の理由はどこにあるか、④自分が転校生ならどちらの挨拶をするか、⑤それはなぜか、について質問紙にて回答させた。①の質問については、1：自己高揚的自己紹介、2：自己卑下的自己紹介、3：どちらでもないの3件法で回答を求めた。また、選んだ回答の好感度について、1：悪い～5：良いの5段階で回答を求めた。②の質問については、1：「自分のことをしっかりアピールできているから」、2：「自分に自信を持った内容だから」、3：「自分をひかえめに表現しているから」、4：「一般にそのような挨拶をするのは礼儀正しいことだから」、5：「その他」の5件法で回答を求めた。③の質問については、1：「自分のことをアピールし過ぎているから」、2：「自分に自信を持ちすぎている内容だから」、3：「自分に自信のない内容だから」、4：「自分を控えめに表現しすぎているから」、5：「その他」の5件法で回答を求めた。④の質問については、1：自己高揚的自己紹介、2：自己卑下的自己紹介の2件法で回答を求めた。⑤の質問については、1：「自分のことはしっかりと、アピールする方がいいと思うから」、2：「自分に自信のあることは、そのとおり伝えた方がいいと思うから」、3：「自分を控えめに表現した方がいいと思うから」、4：「一般にそのような挨拶をするのが礼儀正しいことだから」、5：「その他」の5件法で回答を求めた。なお、大学生に対しても同様の方法をとったが、転校生という設定は現実味が薄いため、文学部から法学部に転部してきた学生の自己紹介であるとした。

2. 3 場面例

(小学生に対する自己高揚的自己紹介例)

「今日は。〇〇と言います。山中小学校から転校してきました。好きな教科は算数で、嫌いな教科は国語です。前の学校の算数のテストではいつも百点をとって、先生から誉められていました。この学校でも一生懸命に勉強して、国語でも百点をとりたいです。よろしくお願いします。」

(小学生に対する自己卑下的自己紹介例)

「今日は。〇〇と言います。山中小学校から転校してきました。好きな教科は算数で、嫌いな教科は国語です。一生懸命に勉強して、国語も好きになりたいです。前の学校の授業は進むのが遅くて、算数も国語も、まだ分からないことが沢山あります。みなさん教えて下さい。よろしくお願いします。」

3. 分析結果

3 節では、呈示の動機に関連するいくつかの項目について検討を行う。

3. 1 好ましい呈示の年齢差に関する検討

図 1 に、各学年ごとの、好ましい呈示の回答率を示す。図 1 より、いずれの学年でも卑下的な呈示が好まれていることがわかる。また、どちらも同じ程度という回答はほとんどないこともわかる。この結果をより詳細に分析するために、好ましさの 5 段階評価を用いる。分析にあたって、どちらでもないと回答した人は省き、高揚的な回答を好ましいとした人の 5 段階評価は正の値、卑下的な呈示を好ましいとした人の 5 段階評価を負の値とした。すなわちこの尺度は、正の方向に絶対値が大きいほど高揚的な呈示を好ましいと評価することを意味し、負の方向に絶対値が大きいほど卑下的な呈示を好ましいと評価することを意味する。

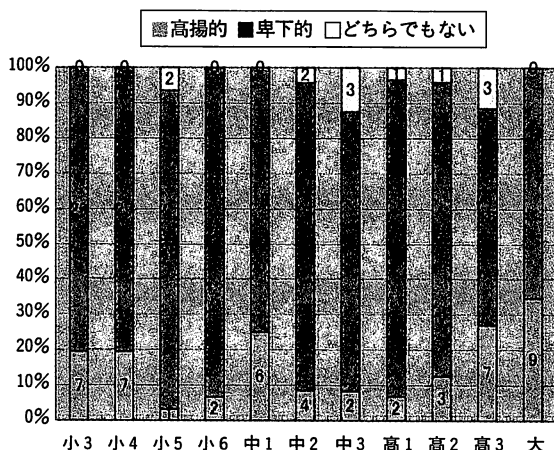


図 1 好ましい呈示の学年別分布

図 2 に、各学年ごとの上記の尺度の得点を示す。図 2 より、全体としては卑下的呈示を好ましいと感じていることが分かる。また、性別および、学年の主効果が優位であった。

学年についてみると、小学生では、高学年になるほど卑下的な呈示を好ましいと評価することがわかる。一方高校 3 年生や大学生になると、高揚的な提示を好ましいと回答する割合が増加している。このように学年による呈示の選択

の違いは、小学生においては発達のな理由からと考えられ、高校3年および大学生においては、社会的な要因によるものと考えられる。

性別については、ほとんどの学年において、女性のほうが男性よりも卑下的な呈示をより好ましいとしている。

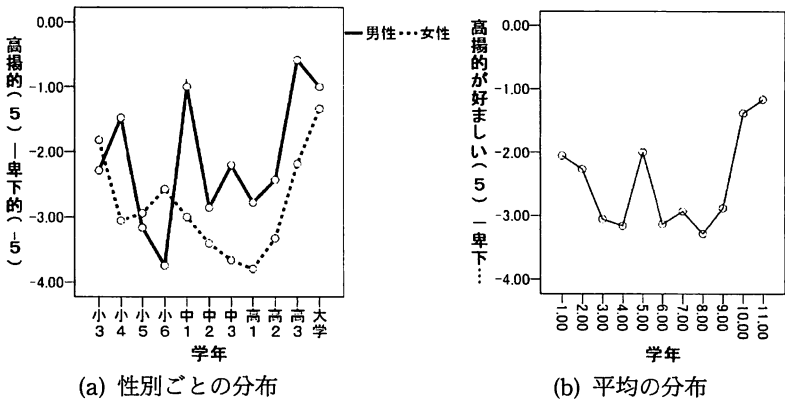


図2 学年—好ましい呈示の度合い

3. 2 好ましい呈示及び好ましくない呈示に対する理由の検討

表2および、図3に、高揚的な呈示及び、卑下的な呈示を好ましいと思う理由についてまとめる。高揚的な呈示が好ましい理由として、「自分のことをしっかりとアピールできているから」というものが最も多く、44%であった。一方、卑下的な呈示が好ましい理由として最も多かったのは、「自分をひかえめに表現しているから」で、48%であった。

3. 4節においても考察するが、この結果で注目すべき点は、卑下的呈示を好ましいとしながらも、その理由として、「自分のことをしっかりとアピールできている」、「自分に自信を持った内容だから」という回答が合計29%も得られている点である。好ましい呈示とその理由が対応していないように見えるこの結果は、好ましい自己呈示が確立する発達のな過程を明らかにするための手がかりとして、重要な観点になりうると考えられる。

例えば、控えめだからという理由から、卑下的な呈示を好ましく思っている人は、好ましい呈示と理由が一致していると言える。このような被験者については、卑下的呈示を選択するという行動と動機が一致していることから、意図的に、さらに言えば戦略的に呈示を選択していると考えられることもできる。それ

に対して、自分のことをしっかりアピールできているという理由から、卑下的な呈示を好ましく思っている人は、好ましい呈示と理由が一致していない。このような回答をした被験者の学年分布を図4に示す。図4より、このような回答をした被験者の76%が小学生であることから、このような不一致の理由の一つとして、意図的に呈示を選択できる段階まで発達していない可能性が考えられる。これらの被験者は、感覚的には卑下的呈示を好ましいとしているが、その理由について自分でも十分意識できていないと考えられる。なお、内容的には卑下的であるにもかかわらず、自分の考えをしっかりと伝えてしていると捉えていることから、内容の真偽にはそれほど関心がなく、呈示の態度の方に関心があることが推測できる。

表2 好ましい呈示の理由

	1	2	3	4	5	合計
高揚的	22 (44.0%)	16 (32.0%)	4 (8.0%)	5 (10.0%)	3 (6.0%)	50
卑下的	56 (20.7%)	22 (8.1%)	125 (46.1%)	49 (18.1%)	19 (7.0%)	271
合計	78 (24.3%)	38 (11.8%)	129 (40.2%)	54 (16.8%)	22 (6.9%)	321

1：「自分のことをしっかりアピールできているから」、2：「自分に自信を持った内容だから」、
3：「自分をひかえめに表現しているから」、4：「一般にそのような挨拶をするのは礼儀正しいことだから」、5：「その他」

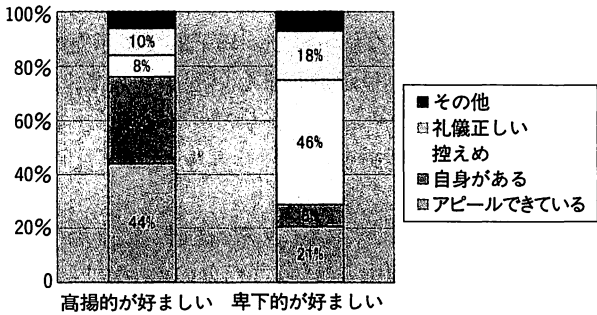


図3 好ましい呈示の理由

表3および、図5に、高揚的な呈示及び、卑下的な呈示を好ましくないという理由についてまとめる。卑下的な呈示が好ましくない理由として、「自分に自信のない内容だから」というものが最も多く、36%であった。一方、高揚的な呈示が好ましくない理由として最も多かったのは、「自分に自信を持ちすぎている内容だから」で、51%であった。好ましくない呈示の理由については、呈示内容と理由とが比較的良く対応している。

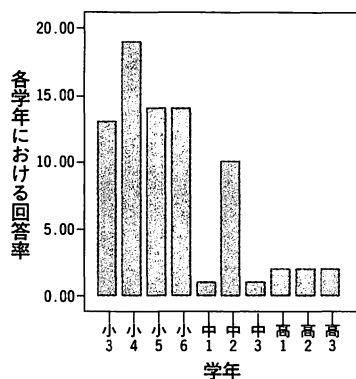


図4 卑下的行動と動機が不一致の被験者の学年分布

表3 好ましくない呈示の理由

	1	2	3	4	5	合計
卑下的	5 (10.0%)	5 (10.0%)	18 (36.0%)	13 (26.0%)	9 (18.0%)	50
高揚的	103 (38.0%)	137 (50.6%)	8 (3.0%)	6 (2.2%)	17 (6.3%)	271
合計	108 (33.6%)	142 (44.2%)	26 (8.1%)	19 (5.9%)	26 (8.1%)	321

1:「自分のことをアピールし過ぎているから」、2:「自分に自信を持ちすぎている内容だから」、
3:「自分に自信のない内容だから」、4:「自分を控えめに表現しすぎているから」、5:「その他」

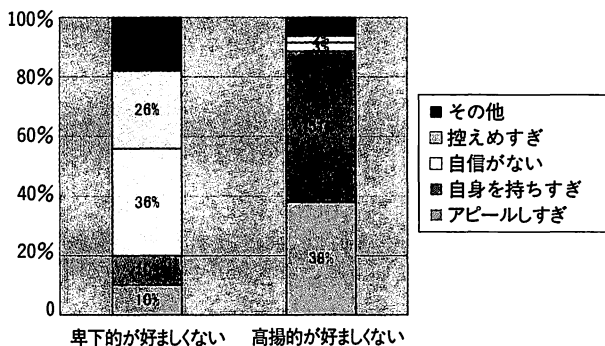
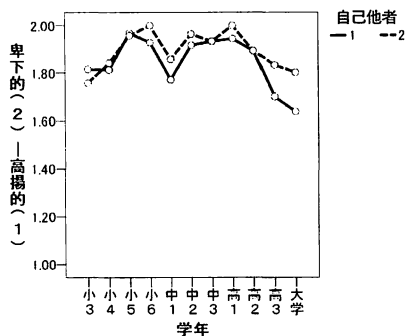


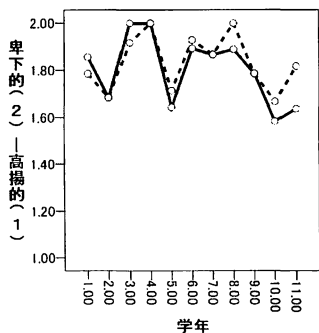
図5 好ましくない呈示の理由

3. 3 好ましい呈示と自分が行う呈示との関係

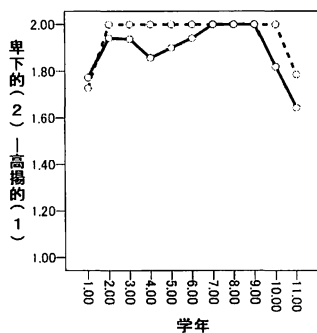
図6に好感のもてる挨拶と、自分ならどちらの挨拶をするかについて、1:高揚的、2:卑下的としたときの学年ごとの得点を示す。また、これらの得点について、性別(男女)×学年(11学年)×自己他者要因(他者の挨拶、自分が行う挨拶)の分散分析を実施した。その結果、性別と、自己他者要因の主効果



(a) 全体



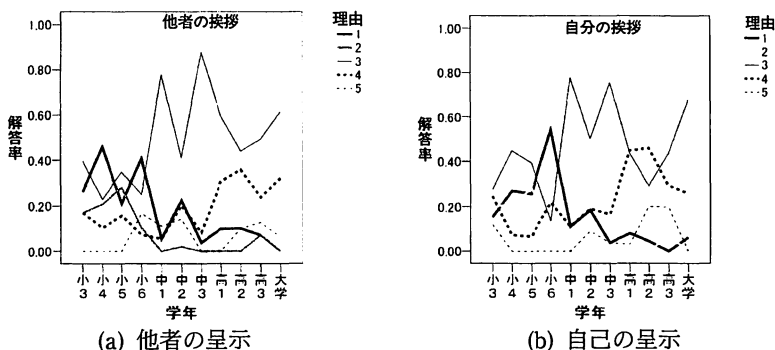
(b) 男性



(c) 女性

図6 好ましい呈示と自分の行う呈示の関係

が優位であった。女性の方が卑下的な呈示を好ましいと思っている。また、卑下的な挨拶を好ましいと思っている割合以上に、卑下的な挨拶を実行する割合の方が多い。すなわち、一部の人のについては、受け手としては高揚的な呈示が好ましいとしながらも、実際には自分は卑下的な呈示を行うという、ギャップが存在することが示唆される。この点は、今後質問紙実験を実施するに際して非常に重要である。すなわち被験者にとって、聞き手として好ましい呈示と、当事者として好ましい呈示が異なるため、どちらについて質問しているかについて、被験者がはっきり認識できるように質問する必要があることを示唆している。



理由1：自分のことをしっかりアピールできている，理由2：自分に自信がある，
理由3：控えめ，理由4：一般的な礼儀，理由5：その他

図7 呈示の印象動機の学年分布

3. 4 挨拶場面における呈示動機

好ましく思う他者の呈示と，自分が選択する呈示に対して，その理由を5件法によって回答を求めた。ここでは，自分が聞き手の場合も，発話者の場合もいずれも卑下的な挨拶を好ましいとした人のみを対象とした。このような回答の組み合わせをした被験者は264名で，全体の約80%であった。自己他者要因（他者の挨拶，自分の挨拶）×学年（11学年）×理由（5件）×性別（男女）の分散分析を行った結果，学年，理由の主効果及び，学年×理由の交互作用が有意であり，卑下的な呈示が好ましいとしている人の中でも，その呈示動機は，学年によって異なっていることが示された。「自分のことをアピールできている」，「自分に自信がある」という理由の回答率は学年が高くなるとともに減少し，逆に，「控えめに表現しているから」，「一般的な礼儀だから」という理由の回答率は学年が高くなるとともに上昇している。高学年になる程，「控えめ」「一般的」という理由から卑下的な呈示を好むということについては，好ましい呈示と理由が一致しているため，3. 2節で考察したように，意図的あるいは戦略的な行為として解釈することができる。また3. 2節と同様に，小学生において，卑下的な呈示が好ましいとしながらも，その理由として，「自分のことをアピールできているから」，「自分に自信があるから」，という回答がそれぞれ約20%程度なされている。すなわち，小学生では卑下的な内容の挨拶であっても，自分のことをしっかりと紹介できていると認識する割合が比較的高いことが明らかになった。一見すると，好ましい呈示（卑下的な呈示）と理由

（アピールできている、自信がある）とが対応していないようにも見える。この理由については、3. 2節で考察したように、小学生においてはそれ以上の学年と比較すると、意図的に呈示を選択できる段階まで発達していない人の割合が多いためだと解釈できるが、今後より詳細な検討が必要である。

4. 考 察

本調査を通して、児童期・青年期の自己呈示について、以下のような結果を得た。

- ①小・中・高・大学生の全ての被験者において、自己卑下の呈示者に対して好印象を抱くことが分かった。小学校3年生の段階より、自己高揚的呈示者よりも自己卑下の呈示者に対し好感を持つという感覚を習得していることが明らかとなった。
- ②①の通り、全体としては、自己卑下の呈示者に対して好印象を抱く割合が高いが、自己高揚的呈示者に対して好印象を持つ割合のみに注目すると、小学校3、4年生および、高校3年、大学生においてその割合は大きくなる。
- ③全ての学年を通して、男性よりも女性の方が卑下の呈示をより好む傾向にある。
- ④卑下の呈示を選択する動機については、全体としては、控えめだから、一般的だからという理由が多かった。その一方で、小学生では他の学年と比べて、自分のことをしっかりとアピールできているからという回答の割合が高かった。
- ⑤好ましい呈示とその理由については、自分が聞き手の場合と、発話者の場合で、明確な差は見られなかった。

本稿において得られた結果について、吉田他(1982)の研究結果との比較において考察する。吉田他(1982)の一連の研究結果における主要な指摘は、卑下の呈示が好ましいとする認識が、児童の段階から発達しているという点であり、本稿における上記の結果①は、この結果を支持するものである。また、女児の方が男児よりも卑下の呈示を好むという結果も得られており、これも上記の結果③と対応するものである。ただし、このような性差の生じる要因については本稿の範囲からでは分析できないため、更なる検討が必要である。

また学年ごとに見ると、吉田らの結果は、高学年になるほど卑下の呈示の割合は高くなり、小学校5、6年生で頭打ちになるというものであり、本稿における結果②と対応している。すなわち、小学校3、4年生の段階で、次第に卑下の呈示を身に付けていくという傾向は現在においても支持されたといえる。

吉田らはさらにいくつかの検討を行い、重要な指摘をしている。それは、聞き手が知らない人の場合、上記の結論とは逆に、高学年において呈示が高揚的に変化するというものである。すなわち、どのような場合であっても卑下的な呈示が望まれるという単純な認知ではなく、聞き手の存在に影響を受けるさらに高度な認知の存在を示唆しており、この結果は、他者からの評価を意識して、自己呈示が発達的に変化する可能性を示唆している。本稿における上記の結果②からも、類似した結論を見出すことができる。すなわち、高校3年生および大学性において、卑下的呈示を選択する割合が減少し、高揚的呈示を選択する割合が増加していることから、これらの学年については他者からの評価を意識して、自己高揚を目的とした高揚的呈示を選択すると考えられる。吉田らが小学校高学年においてこのような傾向を見出したのに対し、本稿においては、聞き手を直接的に統制していないため、かなり高学年にならなければこのような傾向は見出せなかった。聞き手と発話者の関係が呈示にどのような影響を及ぼすかは重要な検討項目であり、今後詳細な検討が必要であると考ええる。

本稿においては、吉田らの研究で検討されていない項目として、自己呈示の動機についても検討している。結果④において示したように、卑下的呈示を好ましいとした理由を分析した結果、学年によって差がみられることが示された。小学生においては、卑下的呈示にも関わらず、「自分のことをしっかりアピールできている」という回答が見られたのに対し、学年が上がるにつれて、この理由が減少する代わりに、「一般的だから」という理由が増えている。これは、学年が上がると、一般的に控えめな呈示が好まれることを意識していることから、戦略的な行為として自己卑下的提示を選択していると捉えることができる。一方、小学生では、そのような戦略性が十分に意識されていないと考えられる。

以上のように、本稿において、幅広い年代を対象として自己卑下的提示の印象と動機を検討した結果、特に小学校低学年及び、高校3年から大学生にかけて、自己高揚的呈示の選択割合が増加することを示した。この結果から、発達の要因のみならず、社会的な要因の存在が示唆されるが、具体的にどのようなやり取りを通じて、児童の自己卑下的呈示が形成されるのかについて更なる検討が必要である。

〈引用文献〉

安藤清志 1994 見せる自分／見せない自分－自己呈示の社会心理学 サイエンス社

吉田寿夫 1983 児童の自己呈示の発達に関する研究 日本教育心理学会,30,
120-127

キーワード 発達, 児童, 自己卑下的呈示